

## 同音異義表現の外国語訳についての検討と実践

### —「あき（秋・飽き）」と「かる（枯る・離る）」を例に—

フィットレル アーロン

発表者は数年前から、掛詞・縁語などの同音異義表現の外国語訳と海外における受容について検討しており、日本の古典和歌のハンガリー語訳をしている者として、その翻訳方法について実践的に考察している。先行する拙稿として、複数の掛詞と縁語が用いられている二重文脈歌の翻訳についてのものがある（「掛詞の外国語訳の方法について—複数の掛詞・縁語を使用した二重文脈歌を中心に—」『日本研究』60、2020年）。その中では、『古今集』、『新古今集』、『百人一首』などの二重文脈歌の外国語訳について検討し、翻訳方法を十一種に分類した。原典の修辞法と表現方法をいかに正確に伝達するかという観点から、それぞれの方法の問題点について指摘し、翻訳方法の改善に向けて、寓喩的な翻訳方法を提案してみた。また、近時、同音異義表現の物象と人事との間の内容的な関連について、用例を具体的に検討し、(1)物象と人事の内容の間に共通性がある例、(2)縁語によって内容的な関係が成立する例、(3)物象のイメージと関連する他の歌語への連想を通して内容的な関連が成立する例、(4)本歌・本説によって内容的な関連が成立する例という4種類に分類してみた（口頭発表「和歌における同音異義表現の物象と人事との関連性について」和歌文学会第67回大会、2021年9月19日）。また、それが既存の外国語訳においてどのように現れているのかについても検討した。

今回は、上記の研究を踏まえて、先行翻訳が多い『古今集』と『新古今集』を中心に、この二集に例が比較的多い「あき」と「かる」という二つの同音異義表現に注目し、その英訳とドイツ語訳における訳し方について検討したい。「秋」と「飽き」、および「枯る」と「離る」との間に、内容的な関連が見出しがたいため、外国語訳において、両方の内容を織り込むことが困難であると思われる。

「あき」の英訳の場合、（風などが）冷たいと（人の態度が）冷淡であるという意味も含んでいる「chill(y)」という語を用いることや、縁語を用いることなどによって反映させる例がある一方、英訳とドイツ語訳においても、「恋の秋」や「心の秋」という表現を用いる例が見出せる。しかし、そこから「飽き」が読みとれるのが疑問になる。そこで、英詩やドイツ詩における秋のイメージなどについても検討したい。

## 同音異義表現の外国語訳についての検討と実践 —「あき（秋・飽き）」と「かる（枯る・離る）」を例に—

フィットレル・アーロン 早稲田大学高等研究所

日本古典文学を外国語に翻訳することは、それぞれの作品を異なる言語と文化と時代の人々に伝達することを意味する。古典文学を正確に伝えるため、この言語的、文化的、時代的な距離をより縮め、文学作品として鑑賞できる、かつ日本文学、文化の特徴が理解できる翻訳の作成が望ましいと思われる。発表者はこの方法を探求し、先行する外国語訳における手法について調査し、受容側の文学の表現方法やモチーフを検討し、近似する概念などをもとに、翻訳方法の改善について考察し、実践している。

近年、古典和歌の修辞法の翻訳方法に焦点を当てており、現在は掛詞などの同音異義表現について考察を行っている。同音異義表現は、共通する音声に基づき、両方の内容（多くの場合、景物と人事）の間にも、関連性が見られる。これについて時枝誠記氏は、掛詞の両方の意味の間に論理的な関係は見いだせないものの、連想関係によって「観念の響合」が成立すると指摘する<sup>[1]</sup>。要するに、和歌の最盛期の人々の脳裏に、音声の関係に基づいて両方の事柄の間に連想関係が出来上がったのである。また、吉野樹紀氏は、掛詞を含む、または掛詞として機能する景物などの物象は、掛詞のいま一方である人事に関わる内容も含んでいると述べている<sup>[2]</sup>。たとえば、「みるめ（海松布と見る目）」や「うら（浦と憂し）」という、掛詞となっている表現によって形成される海岸の風物は実らない恋愛関係に関する歌に一般的に用いられていたが、これにより、これらの掛詞と縁語はそのまま恋の不可能性を表すということである。

一方、このような同音異義表現を外国語に翻訳する際、音声の共通性がなくなることはいうまでもなく、文化と詩的表現の相違により、観念的な関係と連想関係も成り立たなくなる。翻訳者は様々な工夫と苦勞をして、掛詞や縁語といった日本の古典和歌に特徴的な修辞法の翻訳、伝達に心がけてきた。しかし、西洋諸言語への翻訳を見ると、西洋詩の修辞法と概念を使用した訳出方法が多く、中でも採用される方法の上位の三つは「直喩としての訳出」と、「時間的に・空間的に景物と人事を結びつけること」と、物象と人事の内容の間に、原典にない共通性を構築し、「～のように」という表現でつなげるという、「直喩の創作」であるということが明らかになった<sup>[3]</sup>。直喩として翻訳する、または直喩を創作して結び付けることは、西洋詩に直喩が多くあることとも関連すると思われるが、日本の和歌の他の修辞法の翻訳においても、直喩としての訳出と「直喩の創作」を採用する事例が圧倒的に多いため、翻訳において日本の古典和歌の修辞法の多様性が失われる恐れがある。「直喩の創作」の場合はそのうえ、同音異義表現の両方を内容的に結び付けるため、原典にない共通概念を構築し、原歌と大きく異なる内容になる例が少なくない。また、「時間的に・空間的に景物と人

事を結び付ける」という方法は、景物に関する内容と人事に関する内容の時間、または場所が同じであるということであるが、和歌では、掛詞などに出てくる景物は詠歌主体の目の前にあるものではなく、心象風景であることが多く、この訳出方法は相応しくない場合が少なくない。その他、西洋詩においては、景物を用いた修辞は人事の内容を表すための背景、道具であるのに対し、自然と人間が密接な関係にあるという日本の自然観に根付いている和歌では、自然と人間が同等である。同音異義表現の景物と人事の関係も、こういった同等の関係であり<sup>(4)</sup>、これは翻訳においても伝える必要がある。

そこで、発表者は翻訳の可能性も念頭に置きつつ、日本の古典和歌の歌語の相互関係を起点として、同音異義表現の両方の内容の関連性について考察し、以下の 4 種に分けてみた<sup>(5)</sup>。

- ① 物象と人事の内容の間に共通性がある例
- ② 縁語によって内容的な関係が成立する例
- ③ 物象のイメージと関連する他の歌語への連想を通して内容的な関連が成立する例
- ④ 本歌・本説によって内容的な関連が成立する例

これは歌語または同音異義表現を分類するものではなく、具体的に一首一首の歌を分類する試みである。また、一首の和歌は必ずしもひとつの種類に属するのではなく、その中の同音異義表現の文脈における位置によって複数の種類が合わさっている場合が多い。①の「物象・人事の特質の類似性」として、たとえば、小野小町の「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」(『古今集』雑下・938)<sup>(6)</sup>という歌の「うき草」があげられる。②の「縁語による関連」というのは、同じ歌の中に、複数の同音異義表現と他の縁語を通して、物象と人事との内容的な共通性、または類似性が成り立つことをいう。たとえば、「うきめのみおひて流るる浦なればかりにのみこそあまはよるらめ」(『古今集』恋五・755)という歌には「うきめ(浮き布と憂き目)」が頼りなさを連想させ、「流るる」には「泣かるる」という意味も含まれ、あるいは涙が「流るる」ことに連想できることによって、物象と人事との内容的な関連が成立する。このように複数の掛詞と縁語によって景物と人事の内容が二つの文脈として表れているような歌の翻訳に関しては、景物の文脈を前面に置き、その中に人事の内容を暗示する表現を使用する、寓喩的な翻訳を提案した<sup>(7)</sup>。寓喩は西洋詩にもあり、西洋の読者にとっても馴染みがある修辞法であると同時に、この表現方法により、日本の和歌における景物と人事の密接な関係も復元できると思われる。③の「歌語のイメージによる連想」の例として右の「うきめのみ」歌に見られる「かりに(刈りに・仮に)」という同音異義表現が挙げられるが、これに関して、物象と人事との間の内容的な関連が直接には見出せない。この場合は、その歌語のイメージを参考にして、内容的な関連が見出せることになる。それぞれの歌語が決まったイメージを持っており、和歌ではどのような表現と一緒に用いられていたのかも常套的である。したがって、これらの歌語は平安・鎌倉時代の人々の頭の中で連想の関係にあり、ネットワークを構築していた。これは、『和歌初学抄』と『八雲御抄』という中世の歌論書に、景物に関する歌語の詠まれ方についてのリストがあ

ることからも窺われる。外国語において、景物と人事の内容が原典の表現を基にすることだけでは伝えにくい、あるいは誤解を招く恐れがある場合、このような歌語のネットワークを手掛かりにして、該当する同音異義表現と関連がある他の言葉を補って翻訳すると、和歌表現がより正確に伝わると考えられる。最後に④の「本歌・本説による連想」は、同音異義表現の物象が表していることが、それが用いられている本歌または本説の内容と関連がある、というものであり、本歌または本説が関連性を判断する手掛かりとなる。

本発表で取り上げる同音異義表現は、飽きることである「飽き」と「秋」が掛けられている「あき」と、草花が枯れることである「枯る」と離れるという意味である「離る」を掛けた「かる」である。

「あき」の場合は、漢文学の影響で定着した悲しさと寂しさという、秋の季節に付着するイメージと、恋人に飽きられ、忘れられる人の寂しさと悲しさとの間に共通概念があるといえる。なお、「あき」という掛詞が用いられている和歌の大半は恋人に忘れられることをいっているが、詠歌主体が世の中に飽きるという趣向の歌もある。しかし、西洋詩において秋のイメージは、自然景物の衰弱、生命力の劣化であり、これによって人の生涯が終焉に近づいているという概念が一般的である。また、色彩豊かな紅葉や収穫の喜びと関連して、人生の活性化の時期であるという詠まれ方もあり、和歌における「飽き」とは大きく異なる。前者の方がより和歌に近く、秋の悪天候が衰退の他、詠歌主体の境遇の厳しさ、困難さをもたらすという類似点が見出せないことはない。日本の古典和歌では、掛詞である「あき」と一緒に詠まれている景物に秋風が圧倒的に多いが、薄や萩や萩などの秋の草花、葛の葉（風が裏返すイメージが強い）や露や時雨、および「過ぐ」も見出せる。秋風が詠まれている歌の英訳の場合、（風が）冷たいということと（人の態度が）冷淡であるという意味も含んでいる「chill(y)」という語を用いることや、他の縁語を用いることなどによって反映させる例がある一方、英訳とドイツ語訳においても、「恋の秋」や「心の秋」という表現を用いる例が見出せる。しかし、特に和歌集の秋歌の部立に配列されている歌の場合、「恋の秋」を除いて、以上のような訳し方から「飽き」が読みとれるのかが疑問になる。そこで、他の景物のイメージを活用して、必要最小限の言葉の補足を行うことによって暗示させるという方法があるのではないかと考えられる。たとえば、風は吹いてきては過ぎていくものであることから、秋風と「飽き」が詠まれている歌の場合、以前のハンガリー語の拙訳において、「消え去っていく秋風 (tűnő őszi szél)」という訳出方法を考えた。これにより、和歌では本来「あき」と一緒に詠まれることがある「過ぐ」を用いることになり、和歌表現の範囲内にあると同時に、風の性質も含まれ、恋人が詠歌主体を忘れて去っていくということも暗示する。また、露や時雨は和歌において広く涙を連想させるものであり、西洋文学にも通用するため、類似性が見出せると思われる。

「かる」の場合は、草花が枯れてしまうことと人が訪れなくなること、歌によって恋人に忘れられることが結び付けられている。季節としては秋と冬の情景で、「あき」と共通するところがある。西洋詩においては、草花が枯れていくことは秋の上記のイメージと結び付け

られており、冬もその延長上にある。したがって、死や滅亡という人事の事柄との関連が強く、人気がなくなることや恋人に忘れ去られてしまうという和歌における概念とは少し異なる。和歌では、「かる」と一緒に詠まれている景物に草が最も多く、「あき」と同じく薄や萩や萩といった秋の草花と野が見られる歌もあり、露と霜も読まれている。枯れるのが草花などであるため、枯れることと（人が）離れていくことも表す表現が鍵語になる。英訳の場合、草花と人間の感情などに関しても用いられる「wither」という動詞を用いて翻訳する例がある。「wither」というのは、「1〈植物が〉しぼむ、しおれる；腐食〔腐敗〕する」と「1a〈色が〉あせる；〈体力・容色・感情などが〉衰える；〈音が〉消えていく」<sup>(8)</sup>という意味があり、1aの用法により、人が訪れてくる意思がなくなる、あるいは恋歌の場合、相手の詠歌主体への気持ちが薄れてしまう（そうしてその結果で訪れなくなる）ということを表すことができる。一方、他の言語においては必ずしもこのような表現があるわけではない。ドイツ語の先行翻訳では、直喩としての訳出や、景物と人事の内容を順番に並べて翻訳するという方法がとられている。

本発表では、「あき」と「かる」という掛詞が用いられている歌を、先行する外国語訳が比較的多い『古今集』と『新古今集』を中心に調査し、景物と詠歌内容を具体的に検討した後、先行翻訳における訳出方法を確認する。次に、西洋詩における秋や枯れた草花のイメージを、事例を取り上げて紹介する。最後に、和歌と西洋詩におけるイメージの相違点と類似点も考慮したうえ、より明解であると同時に、和歌表現と修辞法の特徴も保持する翻訳方法を提案し、実践してみる。

## 注

- (1) 『国語学言論（下）』（岩波書店、1941）第6章「国語美論」
- (2) 「掛詞の基層」『国際文化研究紀要』（横浜市立大学）4（1998年10月）
- (3) 拙稿「掛詞の外国語訳の方法について―複数の掛詞・縁語を使用した二重文脈歌を中心に―」『日本研究』60（2020年3月）
- (4) 鈴木日出男「古今集の比喩」増田繁夫他編『古今和歌集研究集成』（風間書房、2004）
- (5) 「和歌における同音異義表現の物象と人事との間の関連性について」和歌文学会第67回大会（令和3年9月19日、オンライン開催）における口頭発表
- (6) 和歌の本文と歌番号は日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』による。
- (7) 注(3)の拙稿
- (8) ジャパンナレッジ所収『プログレッシブ英和中辞典』「wither」項